平成25年(2013)
阿づまの光
12月号・Decembro

五代教主作 灰釉茶盌 銘「瑞山（みずやま）」（金字松釉）

題字出口直日

通巻第537号
発行 大本東京本部
東京宣教センター
センター長 浅田秋彦
〒110-0008
東京都台東区池之端2-1-44
TEL 03-3821-3701
FAX 03-3821-5283
振替 00160-5-72625
URL http://oomoto-tokyo.com
Mail tokyohonbu@oomoto.or.jp

絶景（ベストショット）

東京宣教センター次長　猪子（いのこ）　恒（ひさし）

十四年ぶりに転勤してきました。現在の東京本部は、東京宣教センターの名に相応しい、新築の八階建てです。少し慣れてきたので、ここからの絶景を探してみることにしました。

というのは、前任部署の梅松塾では、年二回、鳥取と出雲の境にある伯耆分苑の大山農場で作業があり、今年、雨天のため訪れた足立美術館（安来市）で、写真のフレームに見立てた窓枠から、絵画のように映し出される風景を見ていたからです。

東京本部二階の居室は、ワンルームながらも広く快適で「ここからの眺めも悪くないぞ。スカイツリーも少し見えるし」、「いやいや、まだまだ、絶景があるに違いない」と、その景色を求めて歩き回りました。

まず、目に止まったのは二階の講座室前の窓です。ソファーの奥にある大きなガラス窓に近寄って視線を斜め右に移し、水平にかがむと、ビルとビルのわずかな隙間に樹木が見えます。サクラとナナカマドでしょうか、少し色づきはじめています。その奥に木々が作り出す稜線を見て「上野のお山の紅葉だ」と声にならない声がでました。それからあちこちを見回って、八階のエレベーターを出たときでした。右側の窓に、朝日に照らされたスカイツリーが目に飛び込んできます。下に連なる樹木は、やはり紅葉しはじめた上野の森で、手前には不忍池が広がっています。一番近い所には東京本部の大屋根が堂々と広がり、まるできれいに切り取られた一幅の絵のようです。「ここが東京本部の絶景・ベストショットかなあ」と。

納得しながら三階まで降り、朝拝前の静かなご神前に座ると正面に、「いや、ここだ。ここが東京本部の絶景だ」と思わず言葉がでました。そういえば、前任の森良秀さんが「東京本部のご神前は、ある高僧が簡素で美しいと絶賛され、三代教主さまがたいそうお喜びになった朝陽館のご神前を模しています」と離任あいさつで話していた・・・・。朝陽館そっくりの神床が私のベストショットでした。

みなさんも、東京本部にご参拝くださいましたとき、四季折々の絶景を、お探しになってみてはいかがでしょう。ご自分の絶景があるに違いありません。

今月の聖言

うらら日（び）に匂（にほ）ふ神苑（みその）の白梅（しらうめ）の
香（かを）りゆかしき心（こころ）もたばや

出口王仁三郎聖師

第126回大本公開講座「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」

「あの世」を知って生きる
―人は死なない―

講師 浅田秋彦（あさだ ときひこ）
（東京宣教センター長）

霊の存在

人は死んだらどうなるのかという疑問は、人生の大きな課題です。この疑問を解決することで、生き方が変わってくることもあるかと思います。

死後の世界（あの世）を、大本では霊界といいます。現実の世界に対して、霊界は目には見えない世界です。肉体は目に見えるので、例えば「あの人は細型で顔が整っている」と容姿を判断できます。しかし、心は目に見えないので、人前に形を出すことはできません。でも心は存在しています。霊界も同じで、目には見えなくても存在するのです。

〝霊〟は人の心の元、生命の元ともいえます。その形を保つことができるのは、その中に〝霊〟が入っているからです。

〝霊〟にはいろいろあります。鉱物や空気にも〝霊〟は存在し、その場合、非常に希薄な状態です。植物、昆虫、動物にも〝霊〟は宿っています。このように〝霊〟はいろいろな形で、私たちの身の周りに存在しています。

意識を持った〝霊〟は私たちの心にあり、肉体と同じような形をしていて、これを〝精霊（せいれい）〟といいます。普遍霊や動植物に比べて、はるかに精巧、精妙だからです。寝ている時に見る夢も、この霊のはたらきです。肉体が休んでいるとき、心・霊が霊界に行って、それを見ている状態をいいます。

科学的な研究として、最近有名になっている書籍があります。東京大学病院で救命救急医をされている、矢作直樹教授の『人は死なない』という本です。この中に、ある臨死体験のエピソードが紹介されています。

五十歳代の男性が、妹を車に乗せて家に向かっている途中、雨が降っていたためにタイヤがスリップし、電柱に激突しました。男性がハッと目を覚ますと、妹と並んで上から車を眺めていました。そして妹が「お兄ちゃんは戻りなよ」と、その男性に言ったそうです。その瞬間、男性は車の運転席に横たわった状態で意識が戻ります。実際の車は電柱に巻きついた状態で大破していました。妹は頭を電柱に直撃し即死でした。

こういった臨死体験談は、世界中にたくさんあります。人間は霊肉脱離といって、肉体から人の霊（精霊）が抜けることによって死に至るのですが、それまでは〝魂の緒（たまのお）〟という緒でつながっています。それがつながっている限りは、この世（現界）に戻ってくることができるのです。

また、退行催眠といって、人の心の奥に行き、過去にまでさかのぼり、記憶を引き出す催眠術があります。この退行催眠により、前世のことや生まれてくる前のことが分かるのも、実は人の精霊には、すべての経験、記憶を蓄積しているという特性があるからだと説明できます。

このようなことを通して、霊界の存在が科学的にも説明されるようになりました。

霊界の構造

大本では、私たちの住むこの現界と、霊界の二つを合わせて、一大霊妙世界といいます。そしてその霊界の中には、「神界（天界）」と「地獄界」があって、その間に「中有界（ちゅうかい）」があります。この三つに分かれているのが、大本の霊界観です。

人は死ぬと、まず中有界に行きます。「三途の川を渡ると、もう戻って来られない」というのを聞かれたこともあるかと思いますが、この三途の川の先が中有界です。大本では三途の川を渡る時に、着ている着物の色が変わると教えられています。その色は、その人の現界での生活状態を表していて、現界で行ってきた全ての記録なのです。つまり、現界で生存していた時の行為や心の正邪によって、霊界の中の天界に行くか、地獄に行くかという判断が下されているというわけです。

この時、極善の人、魂がきれいで神さま第一に、あるいは世のため人のためにと善行を積んだ人は、すぐに天国へ上ることになります。逆に極悪の人、自己中心的で、また虚偽を繰り返すなど、誰の目から見ても悪いことばかりをしてきた人は、まっすぐに地獄界へ行きます。極善、極悪とすぐに判断されない人は死後、ほとんどは五十日間（仏教では四十九日間）中有界で過ごすことになります。

このような場面は、出口王仁三郎聖師が口述した根本教典『霊界物語』に詳しく明確に示されています。

神界と地獄界

神界には天国と霊国があり、最も美しく、清く明るい境域で、正しい神々や正しい人々の霊魂の安住するところです。さらにそれぞれ三つに段階が分かれており、神に一番近い第一天国・霊国、次に第二天国・霊国、次いで第三天国・霊国があります。

天国には主の神が太陽と顕現され、愛善の源泉となり、天人が住まいしています。その生活は大神の神徳を賛美し、天職として農工商などの仕事も担いながら、報恩感謝の祭祀に務めています。霊国では主の神は月と顕現され、信真の源泉となり、神教を伝達する天使がいます。天人・天使は不老不死で、男性は約三十歳、女性は二十歳くらいの容貌をしています。

地獄界には、虚偽に満ちた根の国と、悪欲に満ちた底の国の二つの境域があり、これもそれぞれ三段階の区画があります。

地獄の意思想念は、争い、憎しみ、妬（ねた）み、疑い、仕返し、不平不満などです。それらは神のみ心に背いた、われよし、強いもの勝ちの心から発し、それが凝り固まって、出来上がった世界なのです。

しかし、そのような地獄的な心に墜落（だらく）している霊魂に対しても、天国へ教え導こうとされる神の救いのはたらきは、絶えず行われています。神は全ての霊魂を天国へ救おうとされ、最終的には、地獄を無くしていくお気持ちで、救世の神業をされているのです。

ことさらに神は地獄を造らねど己（おの）が造りておのが行くなり

（出口王仁三郎聖師）

霊界と現界の関係

私たちの肉体は現界に生きていますが、心の中の想念は霊界に属しています。想念は極微の世界から、宇宙の果てまで届き、隔（へだ）てなく無限であり、時間空間に左右されることはありません。例えば今、東京スカイツリーを見に行こうとします。そのためには、電車に乗って、歩いて現地に向かうという時間と空間に制約されることになります。しかし、霊の世界では、東京スカイツリーを想い、瞬時にそこへ行くことができます。

また、夢枕に立つとか、虫の知らせなどの、第六感、インスピレーション、ひらめきは霊界から暗示を受けているわけです。

このように霊界とは、現界とかけ離れたところにあるのではなく、むしろ重なったところ、背中合わせの状態にあるのです。そして、霊界の出来事や意味が、形になって現れるのが現界なのです。従って、現界の事象には万事、必ず霊界にその元や意味があります。現界は霊界の移写であり、写し世、縮図といわれる理由がそこにあります。

また、現界は霊界から全てのものを守護され、育てられる養成所ともいえます。天国に住む天人は、かつて現界で修業を積んで霊魂を磨いた人だからです。その意味から、現界は霊界の苗代（なわしろ）であり、霊界を育てる存在ともいえます。

正守護神と副守護神

人には、主神から流れてくる本守護神があります。これは、常に霊界にあって、その人の肉体全体を守っています。同時に、正守護神と副守護神というものが存在し、これは良心と悪玉です。この二つは常に反発していて、ある意味で切磋琢磨しているといえます。

また、霊のはたらきからいえば、人は〝一霊四魂〟というものを神さまからいただいています。一霊とは直霊であり、荒魂（あらみたま）、和魂（にぎみたま）、幸魂（さきわいたま）、奇魂（くしみたま）の四つを四魂といいます。

本来、本守護神と正守護神はどちらも正しい神のもとにありますが、副守護神がまさって地獄界からの悪い霊が入って来る場合もあります。これを整理するために必要なものが省みる＝〝直霊〟で、〝なおひのみたま〟ともいいます。

このように、人間の心・霊はとても複雑ですが、私たちには自由意思が与えられていて、善と悪どちらにでも行くことが可能です。動植物は、天賦（てんぷ）的な本能によって動いているので、悪い方へは行きません。しかし、人には善悪どちらでも選べるというところが、良いところであり、悪いところでもあるわけで、その中で、自分で判断し、一つの答えを出していきます。

悪い方に行かせるからといって、副守護神を追い出すことはできません。ただし、副守護神を向上させることはできます。神さまはそのために、素晴らしい〝一霊四魂〟を人間に与えて下さっているのです。

人間が良い方に心を向けていれば、〝一霊四魂〟はどんどんはたらいて良くなっていきますが、悪い方に向かっていると、そのはたらきは無くなってしまいます。悪い方に向かわせる邪霊は、隙（すき）をついて人間の欲望の中にどんどん入ってきます。それだけズル賢いので、負けないように正守護神（良心）が勝たなければいけません。

このように精霊をいかに磨いて、良い方に自分を向けて行けるかということが、人生の大きな目的の一つでもあります。

人間の死

現界に生きる私たちには寿命があり、誰もが死期を迎えることになりますが、その時に宇宙から自分が全く消えてしまうのか、もしくは自分の心は残るのか、どちらを覚悟するかによって、大きく人生観が変わります。

これまで述べてきたように、人間の死は、肉体の死であり、精霊の死ではありません。肉体はいずれ無くなりますが、精霊は永遠に生き通しなのです。人間の肉体には、生まれ変わり、死に変わりしながら進化して、子孫を残すという役割があります。死を通して、人間は無限に向上していくのです。

五十六億七千万年もの間、神は宇宙を動かしながら、ご活動され進展を続けています。神が永遠の存在であれば、その活動力の断片であり、神の分霊をいただいている私たち人間も、永遠の生命をいただいているといえます。

大本では人間の死について、『精霊と呼吸および心臓の鼓動との間には内的交通がある』、さらに『肺臓と心臓の活動が全く止む時こそ霊と肉とがたちまち分離する時である』と明確に定義しています。つまり、この肺と心臓が完全に止まって、精霊は肉体から離れるのです。

先に述べた臨死体験者は、霊的に魂は肉体と〝魂の緒〟でつながっているといいましたが、人が死ぬ時〝魂の緒〟が完全に切れるのです。亡くなることを「コト切れる」と表現することがありますが、そのくらいその音は、はっきり聞こえるそうです。

人間の一生を見てみると、最初は天界から生まれ、現界で人間として誕生します。そして、いろいろな人生を歩み、最後に肉体は死んで、霊魂は霊界に復活し、初めて天人として生活をするわけです。

今を大切に生きる

出口聖師は『生前に死後の備えのなき人は死期せまるとき無限の悔いあり』と示しています。これまで一生懸命に生きてきて、突然病気にかかり、医師から「余命があと一カ月です」と宣告されたら、大抵の人はショックを受けると思います。

この時に、霊界を全く知らない人と、霊界の存在を信じ、残された命を大切にしようと思える人とでは、死期を迎えるにあたっての気持ちの整理の仕方が変わってきます。

死に対しての恐怖心を抱くよりも、人間の永遠の生命を信じ、今を精一杯生きることができれば幸せであり、霊魂の向上につながります。これが本当の意味での死後に備えることになりましょう。

東光苑秋季大祭

東光苑秋季大祭・新穀感謝祭・七五三詣りは十一月十日、午前十時三十分から、斎主・出口文営大本楽天社代表のもと執行され、三百四十人が参拝した。

祭員は関東教区各主会の祭務部長、少年少女祭員は、神奈川主会の堀幹矢くんと、同主会の星田夏音さん、佐保さん姉妹。伶人は宮咩会関東支部、大本神諭拝読は佐々木武雄埼玉主会長、添釜は高野社中が担当した。

祭典後、浅田秋彦東京宣教センター長があいさつに立ち、十一月四日に。梅松苑で執行された『大本・道院提携九十年記念祭典』の様子を紹介。

また、台湾道院が行った、フーチ・書畫壇において、『廣化世人』（「み教えを世人に広く伝える」の意）の書画が、大本東京本部に下賜されたことを報告した。

次いで、斎主を務められた出口文営大本楽天社代表から『備えあれば憂いなし』と題して記念講演が行われ、昭和二十一年に発生した南海地震の際、聖師さまがご祈願をされていた様子を紹介し、「信徒として日々の務めを全うし、まことの祈りを捧げる、信仰的な生活環境が、いざという時の心の備えとなる。お互いを思いやる精神が、今の日本人に最も大切なことである」と説かれた。

その後、宮咩会関東支部の皆さまにによる八雲琴『伊勢詣』の奉納行事。最後に、参拝者全員で、ギター伴奏による、愛善歌『栄光』と唱歌『ふるさと』を合唱した。

各主会祭務部長が祭員を務めた

宮咩会関東支部の皆さんによる「伊勢詣」の奉納

出口文営楽天社代表の記念講演

東光苑葬祭研修会

十一月十六日、大本東京本部の二階講座室を会場に、「東光苑葬祭研修会」が開催され、四十二人が参加した。同研修会は、大本祭式認定級と関係がなく、誰でも参加できるのが特徴で今回が初回となる。

昨今の葬祭における実情を踏まえた上で、調度品の飾り付けを行い、実践的な内容を習得した。

葬祭調度品の準備実習

教本2級認定講習会

十月二十六・二十七日の両日、「教本2級認定講習会」が開催され、十五人が参加した。

「実践リーダー教本『中級編』」をテキストに、第一章「宗教について」から第八章「大本の使命」までを全員で音読学習したほか、各章ごとの練習問題に取り組み、また信徒役・未信徒役に分かれての対話実習を実施。

最後に筆記問題と対話実習形式の〝理解度チェック〟に挑んだ。

参加者からは「今まで断片的に頭に入っていたことを、深く理解できました（七十歳代・女性）」などの感想が寄せられた。

解説を聞いて理解が深まった

出口なお・王仁三郎の世界を語る2013

第百二十九回大本公開講座『出口なお・王仁三郎の世界を語る２０１３』は、十一月二十日午後七時から八時三十分まで、港区新橋の航空会館において開催され、浅田秋彦東京宣教センター長が「人は何のために生きるのか～万物に使命がある～」と題して講演を行った。参加者は十四人（内、一般五人）。

講座では、四大主義（清潔・楽天・進展・統一）や、身魂磨きの方法やなどについて具体的に解説。「自分のためでなく、世のため人のために生きることが肝要で、心身を全て神にまかせて、現在のベストを尽くすことが人の天命である」と結んだ。

東光苑祭典・行事予定

平成25年12月

8日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・市杵島姫命例祭

16日（月）午前10時30分執行
開祖聖誕祭（177年）

18日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2013」
講題　泥田に咲く蓮の花に学ぶ
～苦しみが救いを生む～
講師　春風ふくた（漫才師）

25日（水）午前10時30分執行
出口日出麿尊師毎年祭（22年）

平成26年1月

1日（水）午前7時00分執行
新年祭

1日（水）～3日（金）
年賀

7日（火）午前10時30分～
東光苑七草粥接待

12日（日）午前10時30分執行
東光苑月次祭・成人式典

18日（水）午後7時～8時30分
「出口なお・王仁三郎の世界を語る2014」
講題　大本の神示と世界の将来
～出口なおの帰神とお筆先～
講師　浅田秋彦（東京宣教センター長）

19日（日）午前10時30分執行
出口王仁三郎聖師毎年祭（66年）